

# 協励アカデミー 令和3年度 漢方・皮膚セミナー入門研修会レポート

開催日 2022年(令和4年)3月13日(日)  
開催方法 Zoomによるオンライン配信

## ●漢方

指導講演

群馬・(有)ライオン薬局

加藤 秀成先生

「漢方入門 理論と臨床～科学から漢方へ転じて見えたもの～」

## ●皮膚

指導講演

千葉・(有)タカハシ薬局

関口 みよ子先生

「店頭での皮膚病対応と外用剤の使い方」

2022年(令和4年)3月13日(日)午後1時より、協励アカデミー令和3年度漢方・皮膚セミナー入門研修会がZoomにて開催されました。「漢方・皮膚セミナーに興味がある先生! 学んだ翌日に実践したくなる! 漢方と皮膚の『知識』と『相談力』を高める入門研修会」というテーマのもと、170名の先生方の出席がありました。

はじめに「協励十訓」の唱和の後、佐野智総務研修担当副会長よ

り開会の挨拶があり、「協励会は研修に始まり研修に終わるといわれ、なかでも『皮・美・漢』の研修の充実は特に重要であり、漢方は何度も繰り返し聞くことにより身に付いていきます。また皮膚病は見立てや基剤の選び方、養生法等を組み合わせることでより効果的な結果が導き出せます。本日の研修が実のある研修となり、先生方の自己研さんと自己完成の一助となれば幸いです。来年度の協励アカデミーには本日出席された先生方はもちろんのこと、ぜひ仲間を集って参加してください」とお話しいただきました。

最初の指導講演である漢方の部は、「漢方入門 理論と臨床～科学から漢方へ転じて見えたもの～」という演題で、群馬・(有)ライオン薬局の加藤秀成先生(学術研修委員・協励ナイトスタディ講師)にご講演いただきました。

はじめに自己紹介も兼ね、漢方を始めた経緯についてお話しされ

ました。加藤先生は大手製薬企業の研究畑で10年、その後、ご実家の薬局に戻られ店頭立つことになった際、「選定品のほぼすべてに生薬が入っている。生薬・漢方を知らなければここに立てない」と思い、漢方の勉強を始められたそうです。当初は科学の参考書を読んで勉強すれば理解できると思われたそうですが、実際に本を読んでもまったく分からず、ぐうの音も出なかったとのこと。それでもそこから30年、勉強し続けられ、周りのすばらしい先生方との出会いなどを通して薬理と生薬の方剤には乖離かいりがあることを理解され、「漢方は生涯をかけて勉強するもの。そして学んだことを後輩に伝えるとともに日々精進して人に返していく」という信念のもと、日々研さんされているとのことでした。

今回は入門研修会ということもあり、ご自身が漢方を学び始めたころのお話を伝えることが入門編にふさわしいとの考えからこま



群馬・加藤秀成先生



千葉・関口みよ子先生

でのお話をしてくださいました。

続いて漢方を学ぶにあたっての基本的な考え方を話されました。

#### ◇<sup>えんえき</sup>演繹法・帰納法について

理論によって症例から考えるというのが漢方の独特の考え方。漢方理論を知らなければ条文の方法論を理解できない。さらにそれを広げていくこと、応用していくことが重要。一つひとつのことを学んで事象に当てはめ、さらに発展、適応させることが大切。

#### ◇漢方理論の基礎と用語の解説(つまずきの原因である述語・単語について)

「陰陽(太極、万物の象徴)と作用」「気血・営衛・水穀」「気血・営衛の生成」「身体部分の概念(概念図)」「五行配当表」「五臓の相生相剋(木火土金水:店頭で理論どおりに表れる)」「気味と薬能」「経脈・絡脈」等を分かりやすくチャートにまとめ、基本的な概念を解説し

ていただきました。

それらを踏まえ、桂枝茯苓丸について条文の解説から処方ポイントと臨床的なポイント、そして具体的な臨床例をあげられ、入門研修会としてとても分かりやすい内容でした。

そのなかでも、漢方(桂枝茯苓丸)は応用がとても大切であり、条文からひもとく考え方の重要性と、薬局製剤の桂枝茯苓丸と漢方製剤(大草薬品(株)・伸和製薬(株))の桂枝茯苓丸の処方例についてもご説明いただきました。

具体的な処方ポイントとしては、<sup>おけつ</sup>瘀血の証の説明として、女性疾患、痔核炎症性疾患、ものもらい、結膜炎、打撲傷、凍傷、しもやけ、歯肉炎などがあります(瘀血の証さえあればいくらかでも応用できます。店頭で煎じ薬が駄目な若い方には漢方製剤も有効です)。

先生の店頭での症例報告とし

て、できもの(面<sup>めんちよう</sup>疔・ガングリオン)、手術適用の複雑骨折の自己再生症例、悪性リンパ腫の疑い等をあげられ、証の見方・ポイントを理解すると出番はいろいろあると説明いただきました。

実践のすすめとして、「大敵恐るなかれ、小敵侮るなかれ」「病に苦しむ人に希望を与えるために」という言葉でまとめられ、漢方相談はもちろんのこと、選定品販売時にも漢方の考え方を基礎に実践され、その結果として地域のお客さまに信頼される薬局になっているということでした。

最後に、「来期の漢方・皮膚セミナーをぜひ聴講していただき、これからも一緒に学んでいきましょう」という言葉で締めくくられました。

続いて皮膚の部は、「店頭での皮膚病対応と外用剤の使い方」という演題で、「神秘的で私たちの身体

を守ってくれる皮膚という臓器のお話と店頭症例・食事改善の話」について、千葉・(有)タカハシ薬局の関口みよ子先生にご講演いただきました。

まず皮膚病の基礎について、皮膚の構造、各部位の働き、皮膚病のメカニズムの解説をしていただきました。そのなかで「皮膚病は皮膚組織のターンオーバーが狂うことで起きる」「毛細血管から表皮に水分・酸素・栄養素が送られている(食事の重要性・レバコール等での補給)」「皮膚疾患はまずは見極めが大切。湿疹かそれ以外か、その判断を間違えないようにすることが大事」と話されました。その重要なポイントとして、「最初に基剤を考えると」とし、「ワセリンベースかプラスチックベース(ワセリンとクリーム)の間の基剤で水分を吸収)か」について解説いただき、ワセリンを使わない理由としては「水分が抜けないから」で、ワセリンは刺激が少なく保護にはいいが皮膚の間に水分・汗がたまり、かゆみ等を誘発してしまう点をあげられ、次に湿疹の三角形と基剤の関係についての説明がありました。

また店頭での対応について、皮

膚病の見極め方や治療法、薬剤の選択、基剤の重要性についてお話しいただきました。実際の症例から、ワセリンが合わない湿疹例として強ステロイド剤使用の難治性皮膚病のケース(基剤が合わなければ駄目である)、小児の湿疹(皮膚が薄いので注意する。オメガ3・6・9スキンオイル極のみでも十分)や、ステロイド離脱のときの注意点(禁忌や期間)、ワセリンベースで大丈夫な例として、足の裏と手の白癬や手の荒れ等についても解説されました(難治性では漢方の出番もあり)。また趾間型白癬・汗疱・体部白癬・手白癬・カンジダ菌・乳児寄生菌性紅斑・マラセチア毛包炎のほか、スタッフの湿疹・毛染めによるかぶれ・蕁麻疹等について、貴重な症例報告(患部が鮮明で分かりやすい写真)を用い、その見極め方や治療法、薬剤の選択、養生法等について、治療の過程の変化も含め分かりやすく解説をいただき、たいへん参考になりました。

後半では食事の重要性について解説していただきました。実際皮膚病の人はしっかり食べていない人が多く、他の臓器の元気がなくなるから治らなくなる、治療にはエネルギーと治る力が必要という

観点から、誰にでもできる食事改善法として、食事はごはんと具だくさんのみそ汁の一汁一菜で十分なので、ごはんのタンパク源とみそ汁の大豆タンパクをきちんと取ること、炭水化物6:脂質2.5:タンパク質1.5の割合が理想であること、ごはんをよくかみ、甘みを感じて食べることで、感謝して楽しんで食べることが栄養になることなどを教えていただき、「病気、皮膚病の治癒には心と身体のバランスと食事のアドバイスが大切である」と結ばれました。

今回は入門研修会ということもあり、両講師がZoomでチャートや写真等をうまく活用され、とても分かりやすくていねいな解説で、初心者でも漢方・皮膚病の世界に素直に入っていけるのではないかと感じました。

最後に、永島正敏常任理事・研究室長より閉会の挨拶と来年度の漢方・皮膚セミナーへのお誘いがあり、「本日の研修会で得た知識を明日からの店頭での相談に役立てていただければ幸いです」との言葉で結ばれ、「協励五省」を唱和して終了となりました。

(レポーター 学術研修委員 佐々木洋)